京都の水文化（その４）

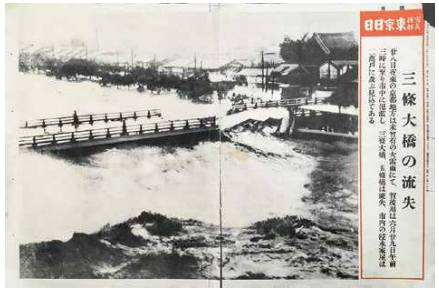
鴨川・等間隔の法則 ～河川が持つ空間的価値～

京都産業大学 現代社会学部 教授
鈴木 康久

一年ほど前になるが、ＮＨＫの人気番組「ブラタモリ」のディレクターから、紹介コメントに使うので「鴨川で好きなところ」を教えて頂きたいとのこと。鴨川の良さは、人々が散歩し、語らう水辺である。「日常の暮らしと共にある鴨川」が頭に浮かんだが、御返事は少し思考を凝らして「鴨川・等間隔の法則が興味深い」とお答えした。その後、等間隔をつくる３つの理由を説明したのだが、番組では「鈴木康久 京都産業大学教授 お気に入りは鴨川、等間隔のカップルの眺めです」とのナレーションがあり、画面はタモリさんの笑顔へと展開していく。これは誤解を招いたかもと思い、放映後にお会いした方はもちろん、授業でも３つの理由について説明させていただいている。その理由とは「構造」、「自然」、「歴史」である。ここでは、この３つの理由も含めて鴨川の空間的価値について述べてみたい。

鴨川に等間隔で座り、談笑する人々

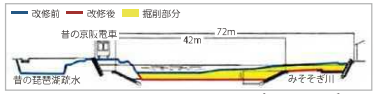
最初の「構造」とは、「鴨川は京都の川に非ず」。『鴨川未曾有の大洪水と舊都復興計畫』（１９３５年）に託された、京都府河川技術者の鴨川に対する強い思いである。計画書は１９３５（昭和10）年に京都を襲った大水害を二度と起こさない為に策定された。京都大水害の概要については、京都市が発行した『京都市水害誌』（１９３６年）が詳しい。当時の状況については、「六月二十七日より降り初めた雨は二十八日夜に入り愈〻激しくなり、更に雷電を交へて豪雨と化し、二十九日朝に亘り車軸を流す大雨繼續、午前十時迄の雨量實に二六九・九粍に達した。（略）市内を貫流する諸川は何れも溢水氾濫し、濁水滔々として市街地を流下し一面の泥海と化した」とある。市全体の被害については、浸水家屋４万３千軒、流失４８０軒、死傷者１００名近く、被災者は十数万人と記されている。河川においても「56橋に及ぶ流失を見たる」ともあり、淡々とした記述からも被害の大きさを知ることができる。具体の様子は東京日日が６月30日に発行した２枚の号外（写真特報）でも知ることができる。最初の号外「三條大橋の流失」には「廿八夜来の京都地方は未曽有の大雷雨にて、賀茂川は六月廿九日午前三時に至り市中に氾濫し、三條大橋、五條橋は流失、市内の浸水家屋は二萬戸に及ぶ見込みである」とある。三条大橋の一部が流され、橋面が洗われるなどの緊迫した様子と、２万戸が浸水する大きな水害であることを伝えてくれる。２つ目の号外は、四条大橋から洪水の様子を見る人々の写真に「濁流を阻む四條大橋」とのタイトルを付け、「大出水のため、二百餘名の行方不明者を出した京都市及びその附近は避難民の収容と、警戒に大混雑を極めてゐるが、六月廿九日午後にいたり漸く減水となった」とある。橋桁スレスレを流れる濁流が緊迫感を伝えつつも、洪水のピークが過ぎたことを感じさせる内容となっている。


号外（写真特報）「三條大橋の流失」
（東京日日：昭和 10 年 6 月 30 日）

号外（写真特報）「濁流を阻む四條大橋」
（東京日日：昭和 10 年 6 月 30 日）

洪水は時の経過とともに沈静化するが、行政機関は復興と河川改修を行うこととなる。そのための計画書には、「水害を繰り返すと、民力の衰微は無論その生命たる歴史的尊厳並みに風光を損する。鴨川は京都市の鴨川に非ず」と続く。これらの理由をもって鴨川は日本を代表する川であるから、国として整備を支援してもらいたいと願いでている。言い換えれば、鴨川は国として歴史的な尊厳を示す場との主張である。この思いは認められ、１９３６（昭和11）年から終戦後の１９４７（昭和22）年にかけて、桂川の合流地点から柊野堰堤までの約18㎞の河床を２～３ｍ下げる改修事業が進められた。戦時中も工事が続けられていることに驚きを覚える。改修では鴨川の風致を考慮し、西側の鴨川河川敷から東側を望む時に、鴨川の水面、街並み、東山三十六峰、天空の連続性が美しく見えるよう、景観に配慮した構造が採用された。河川護岸は自然石を張り、勾配を緩くし、天端にはアール（巻天端）を用いたことで座りやすい構造となった。当時の行政担当者が経済性だけを求め、他の河川と同様に人を寄せ付けない切り立つ護岸にしていたら、今の鴨川の情景は生まれなかった。当時の河川技術者が、鴨川改修に際して一本筋の通った精神を示してくれた事に感謝している。この精神は今も引き継がれており、改修には自然素材が使われ、ベンチひとつにも工夫が見られる。

鴨川の高水敷、自然石を使った巻天端



改修断面（四条付近） 計画水量を 334m³／s→650m³／s
風致を考慮した河川断面図と巻天端の護岸

牛車が鴨川を渡る荒神橋の情景
（明治初期の写真：郷土趣味社発行）

二つ目に挙げる「自然」は、鴨川の水深にある。京都御所の東にあたる荒神橋を写した明治期の写真を見ると、牛が牛車に荷物を載せて川を渡っている。当時は、重量の関係から牛車は橋ではなく、川の中を渡ることとなっていた。今も四条大橋などでは、牛車が行き交った車道を川へと降りる道として使っている。もう一枚の写真では、広い河原に川幅が２ｍほどの小川だけが流れ、農家が野菜を洗っている。これらの写真から、鴨川は水量が少なく、水深も浅かったことがわかる。京都は扇状地であることから多くの水は地下を流れ、沖積平野の下流部に位置する東京や大阪などとは異なる。下流部の都市は水深の深い河川が多くなり、河川に落ちることの恐怖感から川縁にお尻をつけて座る人影を見ることはない。そのような河川ではベンチに座り、川辺を楽しむ情景が多くなる。しかし、鴨川では三条から四条間の高水敷にベンチはなく、人々は川縁の気に入った場所に座り、川の流れを楽しみながらの一時を過ごしている。これは、地形的な理由から鴨川の水深が浅くなるた

荒神橋の附近で野菜を洗う農家
（絵葉書：明治 33 年～40 年）